

また同時に、定位クリックの意義を確認するためにゲルジマーモセットやクロクピタマリン、ピグミーマーモセットに動く餌を見せると、すべてこの型の音を出して追跡する反応を示した。この音は必ず動物が敏捷に動く時にその動きと同調して出されている。以上の結果から location sound である可能性が高いと考えられる。

なお原猿類のロリスやガラゴについても録音を行なう予定であったが材料の都合で行なえなかった。

### 霊長類の頭蓋底の比較解剖学的研究

茂原 信生 (独協医大)

過去の共同利用研究で撮影したX線フィルムを用いて、頭蓋底にみられる諸構造を、出来る限り、トレーシ

グペーパーに作図した。この際には、撮影時にセットした大白歯列面を水平にした基準面を使用せざるを得なかったが、この面が基準面としては安定していないため、側面からのX線写真によって、測定値には補正を加えた。

各計測点で、厚みのある頭蓋底部に存在するものは、正確な点を決定するのがむづかしく、頭骨との対比によって正確を期した。

軟部解剖学によって得られている知見 (内頸あるいは外頸動脈の枝の分岐型、脳神経の走行) とを組みあわせて、頭蓋底での諸形質の分布状態の系統的意味を検討している段階である。

なお、頭蓋底の構造には不定形のものも多く、この場合は、前端および後端をともにプロットした。

## 自由課題

### 霊長類の肺の気管枝の研究

吉川徹雄・中久喜正一 (東京農工大)

吉川・中久喜 (1969) は肺動脈の通過位置を基準にヒト、カニクイザルおよびウマを除く家畜の左肺では上葉気管枝を欠除すると発表した。ついで中久喜 (1975) は多くの哺乳類の肺を調べ、左右の気管支の背、腹、内、外から背側気管枝系、腹側気管枝系、内側気管枝系、外側気管枝系が起り、このほかに、気管の外側から直接2対の気管枝が起る形を哺乳類の肺の気管支分岐の基本と考え、上葉は背側気管枝系の第1枝と気管から直接起る2対の気管枝のうちのいづれかによって形成され、中葉は外側気管枝系の第1枝、副葉は腹側気管枝系の第1枝からなり、下葉は残りの各系列の気管枝からなるとのべた。

この新しい肺の解剖学を霊長類で証明するため、ツバイ、ロリス、リスザル、フサオマキザル、クモザル、ゲノン、サバンナモンキー、パタスモンキー、ギニアヒヒ、マントヒヒ、クロマンガベイ、カニクイザル、タイワンザル、ブタオザル、アカゲザル、テナガザル、チンパンジーの肺にセルロイドのアセトン溶液を注入して鋳型標本を作り、気管枝の排列を調べたところ中久喜 (1975) の4気管枝系列の構想は霊長類にもよくあてはまることを証明することができた。多くのばあい、右肺は、上葉、中葉、下葉および副葉からなり、左肺は、上葉気管枝が欠除するため、代償性に発達して2葉に分かれた中葉と下葉からなる。しかし、ツバイ、リスザル、フサオマキザルでは左肺に上葉を持つ。テナガザルの肺の外観はヒトの肺によく似る。背側気管枝系の第3枝はチンパンジー、テナガザル、タイワンザルやヒトでは欠除するか、

その理由は明らかでない。気管の分岐角度はチンパンジーやヒトでは大きい。

### 霊長類の眼底撮影法の検討、および各種サル の眼底像と異常所見

福井 正信・古川 敏紀  
(筑波大・基礎医学系)  
後藤 俊二 (京大・霊長研)

過去の、霊長類における各種眼底撮影法の検討と、その結果得られた原猿類・真猿類各種の眼底像の比較の一連の実験として、今年度は indocyanin green (ICG) 注入による赤外線吸収眼底撮影、赤外線蛍光眼底撮影につき、*Macaca fuscata fuscata*, *M. fuscata yakui* を対象としてまず試みた。後者は虎斑様眼底群である。用いた filter は KW 12, 29, CC 20 M, F-ND 0.2, 0.3, 0.4, 0.7, 1.0, 1.5, F-BPB 60 のいずれもゲラチンフィルターである。撮影は散瞳処理後、携帯用眼底カメラ (コーワ RC II) によった。この条件下では通常眼底のニホンザルで ND 0.7 装着、CC-20M 装着下で適正かつ視神経乳頭露出も正常な像を得た。ICG は 0.5%, 3 mg/kg B. W. 以上を1秒間静脈投与をよしとした。以上の結果、ならびに前年度までの検討結果にもとづき、各種霊長類の眼底撮影像を収集するとともに、*Toxoplasma* 抗体調査を Sabin-Feldman 法に準拠して行った (Kobayashi et al. 1968)。対象としたのは、原猿・真猿類計 121 頭である。今年度の陽性個体は認められず、この結果、過去3年間 285 個体に就き調査の結果を総合すると、ニホンザル成体、オオガラゴ成体各1例の陽性のみとなった。国内外ともに野生群の感染事故は意外に少ないと予想される。人家に